




【記入用紙】

<p>【教材名】</p>	<p>ブルブルタイマー</p>	
<p>【画像】</p> 		 <p>ホームセンターやネット等で販売されている振動機能付きタイマー</p>
<p>【動画記録】</p>	<p>有・<b>無</b></p>	
<p>【対象】（障害の程度・特性）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部～高等部</li> <li>・盲ろう児（視覚聴覚二重障害）</li> <li>・視覚や言葉による情報の受信・発信に困難があり、コミュニケーションに触覚の活用が有効な幼児児童生徒</li> </ul>	
<p>【単元・活用場面】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活全般（活動の始まりや終わり、予定を伝えるときなど）</li> </ul>	
<p>【ねらい】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の始まりや終わりの時間を、教師と一緒に確認し、やり取りをする。</li> <li>・休憩時間の終わりや次の活動の始まりの時間を知る。</li> <li>・時間の経過や時間の感覚（5分間、10分間、20分間等）を知る。</li> </ul>	
<p>【導入時の配慮点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まずは、本人がしたいことを満足するまで存分にさせる、そして満足して終わるという経験を十分に重ねることが重要である。そのうえで、今後の生活を考えて、時間や時間割という枠組みを意識することも教えていこうと考えて導入した。あくまで、子供の実態に応じて時間をかけてじっくりと取り組む、探索するという段階を経たうえでの次のステップとして考える。</li> <li>※私たちがチャイムの音によって一単位時間の始まりや終わりを知ったり、意識したりすることと同じように、子供が時間や時間割を意識したり、気持ちを切り替えたりするための一つの手段として活用する。</li> <li>→タイマーによって、一方的に好きな活動を止めさせるのではなく、子供が、活動の終わりや、終わりの時間を意識できるようにしていくことが大切である。</li> <li>→教師と決めた時間を確認するための物として活用していく。</li> <li>・導入時、セットする時間は、その子供がある程度一つの活動を満足して終えることができる時間を踏まえて決める。</li> <li>※例えば、好きな活動は20分間、時間を延長する場合は、5分などと決めて、その都度確認するようにする。</li> </ul>	
<p>【使い方】</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①これからする活動や休憩をする前に、それらが終わった後にする「次の活動のオブジェクトキュー」と「タイマー」を子供に触らせて予定を伝える。 →オブジェクトキューとサイン等、子供が分かる手段を使って、「タイマー（20分間）が振動したら、次に〇〇をしようね。」などと子供と確認する。</li> <li>②子供と確認した後、ブルブルタイマーと次の活動を示すオブジェクトキューは、子供がすぐに触って確認できる場所に、子供と一緒に一緒に置く。</li> <li>③活動中、時々子供にタイマーを触って振動していないことを確認させたり、「あと少しで終わりだよ。」などとサインで伝えて、終わりを予告したりする。</li> <li>③セットした時間になりタイマーが振動したら、子供にタイマーを触らせながら一緒に確認する。</li> </ol>	

	<p>→「終わりの時間だよ。次は、〇〇しよう。」と伝えて、やり取りする。</p> <p>④子供がまだ、今の活動を終えたくない伝えてきたときは、「わかったよ。いいよ。あと少し(5分間)ね。次タイマーが振動したら終わりにしようね。」などと、やり取りしたり、確認したりする。</p>
【効果・成果・課題】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休憩や活動をする時間を 20 分、更に時間を延長するときは 5 分毎など、時間を決めて本人とやり取りをすることで、次第に時間の感覚や、終わりの時間を意識する様子が見られるようになってきた。</li> <li>・タイマーの振動をきっかけにして、今やっている遊びや休憩を一旦終えて、教師が誘う活動と一緒に取り組もうとする様子が増えてきた。</li> <li>・活動内容やその日の様子によっては、タイマーが振動して終わりの時間を伝えても応じないこともある。しかし、大人が無理矢理、活動を終わらせたり、次の活動に向かわせたりするのではなく、子供とのやり取りの場面として捉えることが大切である。</li> </ul>
情報提供者問い合わせ先 氏名（学校名）	<p>筑波大学附属久里浜特別支援学校 加藤 敦</p> <p>* 連絡先は研究会事務局までお問い合わせください。</p>